

めでいかすとる *Médicastre*



「黄葉は『もみじ』『こうよう』『おうよう』？」

観楓会、長寿祝い、病・医院永年勤続者表彰式

日時：令和4年10月21日(金) 19:00～
場所：ベルナール鶴岡

日毎に秋も深まり夜寒を覚える頃、鶴岡地区医師会恒例の観楓会が開催されました。

保険衛生福祉担当の鈴木聰理事の司会進行のもと、福原晶子会長の挨拶に続き、来賓の山形県医師会長の中目千之様（代理 山形県医師会副会長 間中英夫様）、酒田地区医師会十全堂会長の佐藤顕様よりご挨拶をいただきました。

続いて、この度めでたく米寿を迎えた真島吉也先生（代理 真島英太先生）、喜寿を迎えた長島早苗先生に、福原会長より賀詞、記念品の贈呈があり、続けてお二方よりご挨拶をいただきました。また、米寿の竹田浩洋先生、喜寿の石田博先生、石原融先生は残念ながら欠席されご紹介のみとなりました。

次に、例年観桜会で行われ、新型コロナウイルス感染症の流行により延期されていた病・医院永年勤続者表彰式が行われました。今年は9名（うち4名ご欠席）の方に、永年の功績を称え、福原会長より表彰状と記念品が贈呈され、受賞者を代表して阿部医院の遠田由美様が謝辞を述べられました。

その後、石原良副会長の乾杯のご発声で祝宴に入りました。引き続き福原会長から令和3、4年度に、新たに当地区医師会員になられた17名の先生方のご紹介があり、出席された上野ファミリークリニックの上野雅仁先生、みやはらクリニックの長島義宜先生、石橋内科胃腸科医院の石橋朗先生の3名の先生からご挨拶をいただきました。

昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響により中止だった観楓会が今年は無事開催され、食事以外はマスク着用、お酌無しなどの制限はありましたが、来賓6名、会員30名、永年勤続者5名、医院従業員4名、職員16名の総勢61名からご出席いただき、これから鶴岡地区医師会を反映するかのように終始大盛り上がりで賑やかな会となりました。コロナ禍で接する機会も少ない中、親睦を深める良い機会だったと思います。宴もたけなわの中、菅原真樹副会長の挨拶で閉会となりました。

観楓会の“楓”的花言葉の1つに、「美しい変化」というものがあるのはご存じでしょうか。季節に合わせて葉の色が美しく変化することからそのように言われているようですが、当地区医師会もこの花言葉のように時代に合わせて輝いていけばいいなと思いました。

荘内地区健康管理センター 健診課 五十嵐 ちづる



福原 晶子 会長



間中 英夫
県医師会副会長



佐藤 顕
酒田地区医師会十全堂会長

米 寿



真島 英太 先生
(真島吉也先生の代理出席)

喜 寿



長島 早苗 先生

新 入 会 員



上野 雅仁 先生



長島 義宜 先生



石橋 朗 先生

【永年勤続者表彰受賞者】

阿部 医院	遠田 由美さん	土田 内科医院	佐藤 有里さん
真島 医院	阿部 聖子さん	鶴岡地区医師会	佐藤日出夫さん
三井 病院	成田 恵さん	鶴岡地区医師会	渡部 順子さん
三井 病院	鈴木 美和さん	鶴岡地区医師会	阿部 美保さん
上野ファミリークリニック	白幡美奈子さん		

謝 辞

本日は、永年勤続表彰を賜りまして誠にありがとうございます。

鶴岡地区医師会の皆様には、ご多忙のところ、この表彰式を開催していただき、また、日頃のご指導、ご協力にも厚く御礼申し上げます。

私は、結婚を機に現在の職場である温海の阿部医院にお世話になることになりました。もともと、地域に密着した家庭的な診療所での看護というのが私の目指す一番のところだったので、前院長の阿部寿美子先生にお声をかけていただけたことがとてもありがたく、今現在もなお阿部医院で働きながらもたくさんの学びを得られていることに、ライフワークとしてのやりがいを感じております。なにより勤続20年を迎えることができましたのも、先生方、職場の皆様のあたたかいご指導、ご支援があってのことであり、また、家族の惜しみない協力や励ましにも感謝してもしきれません。

これからも地域の方々の健やかな生活に少しでも貢献できますように日々日々考え、努力してまいります。本日はありがとうございました。

阿部医院 遠田 由美



第42回東北・北海道医師会共同利用施設連絡協議会への参加とシンポジウム発表

日時：令和4年9月10日(土)～9月11日(日)
場所：ホテルメトロポリタン仙台

荘内地区健康管理センター長 石原 良

宮城県医師会担当の上記の協議会が9月10日、11日の二日間、仙台で開催されました。メインテーマは「医師会共同利用施設一パンデミックを超えて」とされ、基調講演（医療を取り巻く最近の動向と日本医師会：日本医師会会長；松本吉郎先生）、特別講演（医師の働き方改革と医師会共同利用施設：日本医師会参与；橋本省先生）、シンポジウムが行われ、従来行われていた共同利用施設の見学はコロナ禍のため中止となりました。シンポジウムは「医師会共同利用施設の経営を考える」をテーマに行われ、各県よりコロナ禍の共同利用施設の運営状況、対策などについての発表と討論がありました。内容は病院経営に関するもの3題、健診・検査センターに関するもの3題、訪問看護ステーションに関するもの1題でした。私は「コロナ禍における当センターの健診状況と対策について」の演題で発表しました。令和2年度前後の健診状況を比較しましたが、令和2年4月、5月に健診が中止となった影響は年度末までほぼ改善されていました。しかし、がん検診では受診者数、精検受診率の減少を認めました。全般的に東北、北海道の共同利用施設では、この時期のコロナによる経営に対する影響はそれほど大きくはなかったようでした。ただ、病院ではクラスターが発生し、その対策に苦慮したところもあったとのことです。検査センターではコスト面で民間の検査機関に太刀打ちできないため、大手の検査機関と提携して運営をしているところもありました。

この協議会は2年ごとに開催されており、次回、2年後は山形県の担当になるとのことでした。



鶴岡地区医師会勉強会抄録



『在宅で質の高い緩和ケアは提供できるのか?
～訪問診療専門クリニック
立ち上げからの2年をふりかえって～』

訪問診療クリニックやまがた
院長 奥山 慎一郎 先生

2020年初頭から続くコロナ禍の影響は、在宅を含めた医療現場にも大きな影響を及ぼしている。治療を実施してきた基幹病院での入院継続や家族らの面会もかなり厳しい制限を設けられることとなり、人生の最終段階を迎えた患者や家族が「面会できないから“しょうがなく”自宅へ」という思いで在宅療養を選択することも少なくない。このため受け入れる我々の現場では今まで以上に質の高い在宅医療が求められている。そのなかでも“緩和ケア”は終末期を迎える患者や家族を支えていくうえで、とても重要な要素を担っていると考える。

2006年がん対策基本法が成立し、2007年がん対策推進基本計画が策定された際に、緩和ケアの重要性が示されがん患者を対象として整備されたが、現在ではその対象を非がん患者にも拡げ様々な分野でガイドラインの作成なども進められている。「訪問診療」という分野では癌患者はもちろん、心不全や呼吸不全など慢性疾患、神経難病、医療的ケア児、そしてフレイルを生じている高齢者、認知症など幅広い疾患を対象としており、緩和ケアとの親和性は高い。訪問診療専門クリニックを開設するにあたり自分自身に課題として課したのは、「在宅医療」という現場で、これまで病院のなかで、緩和ケア病棟で研鑽してきた質の高い緩和ケアをいかに実践し、地域に普及していくか」である。医院・クリニックだけではなく、訪問看護ステーションや居宅介護支援事業所など在宅医療・福祉にかかる事業所が急激に増え、ケア提供者

も医療従事者だけでなく介護従事者にも広がっている。そのようななかで、“緩和ケア”的質を担保し現場での多職種との連携を密にしていくためには、地域でも多職種チームが必要不可欠と考え様々な取り組みをはじめていた。クリニック2階に30人以上収容できる研修室をもうけており、1回/月で事例検討会や研修会を開催。またwebを利用した多施設カンファレンスを開催できるように機器の整備を実施するなどし“顔の見える関係”を拡げていくことを計画した。しかし、開業から3か月目でCOVID-19感染拡大がはじまり、訪問時にも標準予防策として実施する個人防護具（Personal Protective Equipment：以下PPE）が求められ、手袋、ガウン、サーボカルマスク、ゴーグル、フェイスシールドなど着用を余儀なくされた。「やっと戻ってきた自宅」でフェイスシールド越しにゴーグルで表情もしっかりと見えない医師に、手袋をした手で触れられた患者や家族はどう思うのか、平常時とは異なるこの環境下でどのように訪問診療を提供していくべきなのを考えたとき、“緩和ケア”とは何かを改めて考えることになった。もちろん医療としての質を高めることも重要で、医療用麻薬をはじめとする症状緩和のための薬や看護、ケアの知識はこの20年日進月歩で発展しており、地域全体での知識のブラッシュアップが求められた。

実際には地域の多くの方々に支えられて駆け抜けることができたこの2年間を振り返りながら、当クリニックでの取り組みを報告する。

YBCラジオ「ドクターアドバイスで きょうも元気」ラジオ出演体験記

• YBCラジオ ドクターアドバイスできょうも元気 出演体験記

鶴岡市立荘内病院 内科・緩和ケアチーム 和泉 典子

4回目のYBCドクターアドバイスできょうも元気。コロナ流行第7波、院内外の先生方があわただしく対応される時期でしたが、5年ぶりのYBC山形放送へ。

フリーディレクターの加藤研さんは「朝だ！元気だ！6時半！」としてこの番組が始まってからの専属です。今年11月でこの番組は「20周年」を迎え、県民の聴取率は「5%」、つまり県人口104万人として、約5万人が耳にする番組とのことです。YBCは県医師会と協力し、多くの県民が医療や医師を身近に感じる機会を作ってきたと思うとおっしゃっていました。全ての収録に同席してきた加藤さん、まさに継続は力なりです。

庄内プロジェクト以降、ほぼ同じ構成で「緩和ケア」の話です。それでも、自分の診療や環境がどう変わったか振り返る機会になっています。「緩和ケア？死んでいく人を診るなんてわざわざ選ばなくても」と言われながら医局を離れ、荘内病院に来ましたが、私が置かれた現場も心境もこの15年で変化しました。

最初に、早期からの緩和ケアが定着し、進行がんや再発がんで抗がん剤治療中の患者の紹介が増えました。効果が得られず進行する患者がいる一方で、最近の抗がん剤の進歩が目覚しく、罹病期間の長い患者でも、特に免疫チェックポイント阻害薬が奏功し、「今まで頑張ってきて良かった」と患者と家族、主治医と一緒に喜び合える機会が出てきました。診断時に一般的な予後を伝えられても、命の長さはやはり、



神のみぞ知る、です。最近のエピソードを2例紹介します。就労世代、子育て中の女性、診断時ステージIV。命の危険を伴う中での抗がん剤治療と手術から3年経過、仕事も家事もこなし、当時中学生だったお子さんは志望高校へ進学。最近お母さんへの愛情を直接言葉にされたとのお話を外来で聞き、家族の大病で患者家族は不安を抱えつつも、内面的に成長する機会になりうることを教わりました。また、がん専門病院のセカンドオピニオンで、高齢で積極的治療の適応なし、余命半年、と説明を受け、主治医から緩和ケア外来に紹介された高齢男性は、オピオイドなどの鎮痛薬、不眠や抑うつに対する薬剤、骨転移や腫瘍出血に対する緩和放射線治療を繰り返し、すでに2年半が経過。今も住み慣れた我が家で一人暮らしを続けています。最近の外来で「緩和ケアを選んだから今こうしていられたんだ」と患者家族に言ってもらえたことも嬉しいことでした。当初、死期間際の紹介が多かったのですが、がん医療の進歩だけではなく、医療者側の緩和ケアの認識の変化を実

感します。

また、医療用麻薬の導入時、強い抵抗感を示す患者家族が減りました。オピオイドが非がんでも使用可能な時代となり、もちろん不安なく使うための支援や副作用対策、漫然と処方しないことは重要です。痛みを何とかとってほしいと願う患者さんに対し、「がんの痛みは仕方ない、モルヒネは最期の薬」と誤った認識を、もし未だに医療者側が持っているなら時代遅れということを示しています。

さらに心強いことは、患者との意思決定プロセスを重視する治療医が増えたことです。患者にとってより望ましい選択肢を提示するために、山形大学の腫瘍内科や放射線治療医の参加のもとで開催されるキャンサートリートメントボードで多診療科、専門家の意見を聞く、また、国立がん研究センター東病院との医療連携協定で開設された「がん相談外来」に主治医側から家族と受診するよう患者に促すなど、十分に検討し話し合って方針を決定していることが、併診するとよく見えます。また、重要な場面では、がん領域の認定看護師が患者・家族・各科医師をサポートします。医師-患者関係におけるパートナリズムは時に必要ですが、共同意思決定 (shared-decision making) が納得した治療選択のために常識的な時代になったことを実感します。

そして、人生の最期までどう生きたいか家族や身近な人と互いに話し合う「人生会議 (Advance care planning)」が重要で、前提にある「死」というワードについて、公共電波で発することを私自身が躊躇うことがなくなったとも感じました。放送後の外来で、進行がんで抗がん剤治療中の患者さんに「この先生が最期までみてくれるんだなと思った」と言っていた

だいたることもありがたいことでした。

当日急遽交代になったフリーアナウンサー山田夕美子さんは、こうまとめてはどうでしょう、このお話をぜひしてくださいと、原稿を見て率直に意見をくれました。山田さんが加藤さんの編集の技を褒め、加藤さんが山田さんを頼れるアナウンサーで安心、と褒める。私もお二人に感謝を伝え、終始笑いが絶えない数時間。先生が気持ち良く収録を終えられることができたという加藤さんの言葉に、小さなスタジオのホスピタリティを感じました。

子どもの頃、YBCに曲の電話リクエストをしたことがあります、あのYBCの番組に自分が出る未来など想像していなかったこと、そして鶴岡で出会った多くの方々に支えられて生かされてきたことに思いを馳せながら帰路につきました。鶴岡での仕事を自分視点で振り返る貴重な機会をいただきありがとうございました。



•家内と行ったラジオ収録記

宝田整形外科クリニック 阿部 周市

今回で3回目の収録となります。今回は「スポーツドクターと運動処方」についてお話しさせていただきました。運動処方とは健康づくりのための運動について、頻度・強度・持続時間・運動の種類を規定することで、私は当法人の指定運動療法施設であるメディカルフィットネス La Santé（小真木原）に入会を希望し、運動処方を希望する方に運動処方箋を書いております。もちろん他科の先生から運動処方箋をお書きいただいても構いません。指定運動療法施設では、医師の指示に基づく運動療法を実施する際に必要となる施設利用料について、所得税法第73条に規定する医療費控除の対象とすることができます、利用者は結果的に施設利用料を抑えられます。

健康な人が生活習慣の乱れを改善して健康増進を図る場合と、病気を持っている人が疾患リスク軽減のために行う場合とでは、運動の内容も強度、時間、頻度なども変わってくるように、運動の目的によっても運動処方は変わってきます。

不適切な方法や内容の運動によって、筋肉・関節の障害や心臓血管疾患、突然死を招く恐れもあります。現在の身体状況だけではなく、過去の既往や運動の経験なども考慮することが大切です。運動は一定期間の継続が必要であり、個人の嗜好に合った、飽きずに楽しく取り組める運動を選択したり、安全で効率の良い運動を行うための知識を得るために患者様へ教育したりすることも必要になります。

いつもは山形のスタジオまで一人で行っていたのですが、今回は「収録後に山形で食事でもしましょう♡」との甘言で事務長（家内）を誘



い、運転手として一緒に行ってもらいました。収録当日まで原稿を声に出して読んでいなかつたため、車の中で練習する必要があったのです（月山道の途中で彼女から睡魔の訴えがあり、敢え無く交代する事になりましたが…(T_T)）。しかし今回は運転してもらった以外に、感謝しなければならない事がもう一つありました。水曜日放送分で選曲したサザン・オールスターの「夏をあきらめて」を私が紹介する際に、「晩秋でございますので選びました」と話したのを、「晩秋ではなく晩夏の間違いじゃない？」と収録室のガラス越しに指摘され、「夏も終わりですので選びました」と収録し直す場面がありました。アナウンサーもディレクターも私も、間違いに全く気づきませんでした。

庄内地区の先生が収録の場合、電話収録でも可となっておりますが、修正する際ちょっと大変かなと思います。スタジオに行けば、先の修正のように「夏も終わりですので」と一言話すだけで修正が完了します。それと前回も申し上げましたが、マイクの性能が抜群に良いです。次回は事務長に出演していただくと宣言してまいりました。その際、私は運転手です。

Introduction

研修医



皆さん初めまして、研修医1年目の高山圭介です。私の出身地は山形市で、大学は仙台に新設された東北医科大学医学部から來ました。山形県民ではありますが、鶴岡へ行く機会はなかったため（幼少期に家族と加茂水族館へ行ったようですが覚えてない……）、鶴岡市立荘内病院のことを知ったのは3～4年ほど前でした。山形県研修病院ガイダンスという学生向けのイベントに参加した際に荘内病院のブースで説明を聴き、そのときの研修医の方々の雰囲気が良かったことと、秘書の伊藤さんから病院見学のお誘いのメールをいただいたので、夏休みを利用してこちらへ見学に来ました。午前中は内科の安宅先生に病院を案内していただき、午後は産婦人科の五十嵐先生や研修医の先生方と帝王切開の手術に入りました。お昼はまだコロナが流行っていない時期だったので、9階の食堂で定食をごちそうになったのを覚えています。今は営業を休止していますが、眺めが良く、食事も美味しかったので、食堂が再開されることを願っています。その後、縁あって荘内病院で研修することになり、こうして皆さんへご挨拶するまで至っています。

研修先が荘内病院に決まった後、無事に大学

鶴岡市立荘内病院臨床研修医1年目 高山 圭介

を卒業し、国家試験も合格し、4月から鶴岡で暮らし始めてから半年が経ちました。まだ鶴岡での冬を経験していないので、冬の過ごし方に關して若干の不安はありますが、ここでの生活にも次第に慣れてきました。食品や生活雑貨は近場の主婦の店や、少し離れた場所にあるマックスバリュ、ジェイ・マルエーで買い、食事は自炊や病院内のコンビニ、時折気になった店で外食することもあります。最近は休日に「肉屋食堂」で昼食をとるのがマイブームです。日本海に面しているため近隣に寿司屋が多く、スーパーの魚売り場でも多種類の魚が並んでいて魚を手にとることが増えているので、ここ十数年で一番魚介類を食べている気がします。インドア派なので休日は自室で過ごすことが多いですが、時折、三川イオンや酒田市、時間と気力があるときに秋田県までドライブに行ったことがあります。新潟方面にはまだ行ったことがないので、機会があればそのうち訪れてみたいと思っています。

私が鶴岡へ来た経緯、来てからの生活については以上になります。初期研修は2年間と決まっており、その後は鶴岡を離れることになりますが、ここでの縁や学びは自分の人生の財産になると信じています。残り1年半ですがよろしくお願ひします。



こんにちは。私は4月から荘内病院で勤務させて頂いている初期研修医1年目の伊藤明伸と申します。

研修が始まってから約半年が経過して多くの先生とは既にお会いしており、お話をさせて頂いておりますが、改めて簡単に自己紹介をさせていただきます。

私の出身は神奈川県横浜市です。大学は仙台市にある新設校の東北医科薬科大学を1期生として卒業しました。

趣味は旅行です。学生時代は、長期休みを使ってバイトして貯めた15万円ほどで約1ヶ月間、格安東南アジア旅！（フィリピン、タイ、シンガポール、台湾など）をしたことありました。日本と違って物価が安い国が多く、美味しいものや綺麗なホテルが日本の数分の1の安い値段で、とても満足したのを覚えています。また普段関わることのない外国人と多く関わることで、自分には無い価値観を知ることができたのも良い経験でした。

いつかアメリカかドバイに行ってみたい！と思っています。学生時代は時間はあるけどお金はない。働き始めるとお金は貯まるけど時間がない。中々上手くいかないものですね。

私は今まで産婦人科→外科→内科→循環器内科→救急科→小児科とローテートしてきました。初めの頃は、薬の名前や用量はおろか病棟や救急外来での立ち回り方など何も分からず、ただ先生の後をアヒルの子のようについていく不安ばかりの毎日でした。

しかし最近では多くの先生にご指導頂いて、

鶴岡市立荘内病院臨床研修医1年目 伊藤 明伸

多くの症例や手技を経験し、少しづつ自分で出来ることが増えているので日々やり甲斐を感じています。

ローテートの順番は同期5人でじゃんけんして決めたので、ほぼランダムでした。ですが、結果的に1年間の前半で内科系と外科系をバランス良く回れたのは、内科系も外科系も関係なく搬送されてくる救急外来で仕事をする上では、とても良かったと感じています。

さて、今年から私は鶴岡に初めて住むことになりました。今まで横浜市と仙台市にしか住んだことがないため、本格的な雪国の生活は今年が初めてです。

噂によると鶴岡の冬は風がとても強く、雪が下から降る（！？）といった話も聞いており、少し不安です。しかしながら、ずっと雪が少ない地域で暮らしていたので、初めての雪国生活に子供のような気持ちで少しワクワクもあります。

私はまだ車を持っておらず、大学時代に購入したバイクで移動しています。が、そろそろ寒くなってきてバイクも乗れなくなる季節なので、どうにか車を入手して快適な生活を手に入れたいと思っている所です。

いつも多くの先生に懇切丁寧にご指導頂き、ありがとうございます。

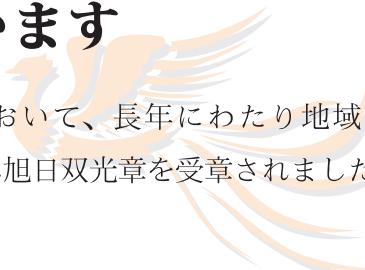
半年経って1人で出来ることは増えてきましたが、まだまだ分からぬことがあります。自分の力で解決できそうなことは自分で調べますので、分からぬことがあったらご指導頂けたらと存じます。

今後とも何卒宜しくお願ひいたします。



土田 兼史 先生 旭日双光章受章 誠におめでとうございます

土田兼史先生は、令和4年秋の叙勲において、長年にわたり地域の保健衛生活動にご尽力された功績が認められ旭日双光章を受章されました。
誠におめでとうございます。



山形県救急医療・救急業務関係者知事表彰

この度 優秀な業績を有する者に贈呈される賞を受賞いたしました。
誠におめでとうございます。

長年にわたり地域の救急医療・救急業務にご尽力された功績が認められ
山形県知事より表彰されました。
(令和4年9月9日表彰)



本田耳鼻咽喉科医院
本田 学 先生



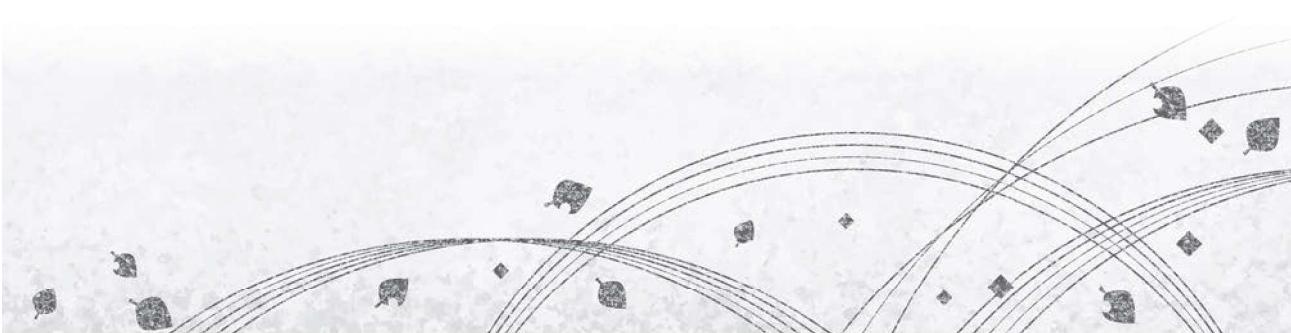
斎藤内科医院
斎藤 純夫 先生



島眼科医院
黒澤 久子 先生



上野ファミリー
クリニック
上野 欣一 先生



医師会ニューフェイス

～令和4年10月1日採用～

①氏名 ②所属 ③趣味・特技 ④ひとこと



- ① 遠藤 愛子
② 湯田川温泉リハビリテーション病院
看護課 準看護師
③ 料理、お取り寄せ
④ 病棟勤務は初めてのため、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、一生懸命努めていきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。



- ① 斎藤 久美
② 湯田川温泉リハビリテーション病院
看護課 介護福祉士
③ 釣り、ハンドメイド
④ 1日でも早く戦力になれるよう、一生懸命がんばります。よろしくお願ひします。

表紙

「黄葉は『もみじ』『こうよう』『おうよう』？」

齋藤 憲

明鏡国語辞典では黄葉と書いて「もみじ」と読むそうです。

- ①晩秋に木の葉が赤や黄色に色づくこと。その葉。
- ②カエデの別称。とあります。

しかし「こうよう」「おうよう」でもよいとの説もあるようです。

編集後記

今年は酒井家が庄内入部してから記念の400年に当たります。酒井家初代の忠次公は徳川家康に仕え、天才軍師と統治力の両方の資質を備えて、徳川四天王の筆頭に上りつめました。その後東北地方の外様大名を牽制する目的で、とくに伊達ストッパー役として三代忠勝公に白羽の矢が立ちました。さてここで疑問です。現代の庄内は新幹線や高速道路網がない辺鄙な田舎ですが、命令とはいえ酒井家はなぜ好き好んでこの地に入部してきたのでしょうか？意外にも当時の庄内平野は東北一の穀倉地帯で、飢饉が生じても「庄内に行けば米がある」というのが共通認識でした。加えて酒田港を持ち、北前船を通して巨万の富が集まるので、大名皆が欲しがる豊かな土地だったそうです。

以後明治に至るまで約250年間酒井家は庄内を治め続けますが、その間三方領知替えや藩校致道館の設立などの出来事がありました。「殿様を変えてくれ」と言う一揆はよくある話ですが、三方領知替えの時は「殿様を変えないでくれ」という珍しい一揆でした。比較的良い殿様だったことが伺えます。そして先日、2024年に開校する中高一貫校の校名が「致道館」に決定しました。個性に応じて才能を伸ばすこと、自ら考えて学ぶ意識を高めることなど、藩校精神が受け継がれます。

明治維新後も酒井家は変わらず庄内に居住して、18代当主の酒井忠久さんが現在のお殿様に当たります。「今も殿様が暮らす街」は全国的にも珍しいそうで、歴史のある城下町鶴岡に住んでいることを自慢したい気分になります。

(吉田 宏)

編集委員：渡邊秀平・菅原真樹・吉田 宏・阿部周市・真島英太・中目哲平

発行所：一般社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

ホームページにも掲載しております [鶴岡地区医師会](#)  URL <http://www.tsuruoka-med.jp>